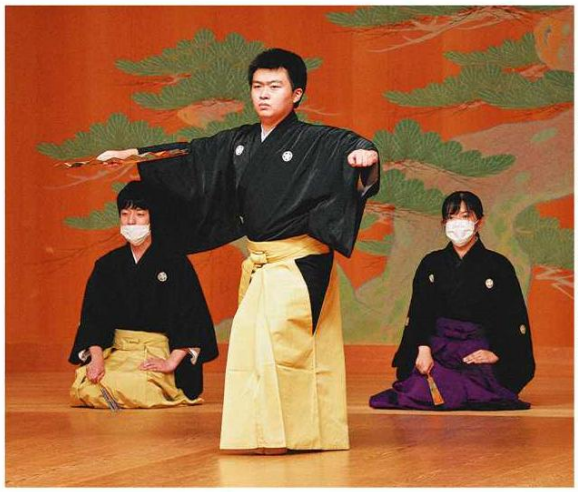
2022年10月08日 中日新聞 朝刊 13頁

東京や関西に次いで能楽が盛んな名古屋で、大学の部活やサークルが能や狂言を上演する「学生能」の活動が衰退している。部員の減少が大きな要因で、活動休止に追い込まれている大学もあり、学生や地元の能楽師らは危機感をつのらせている。

（堀井聡子）

名古屋の学生能 窮地



発表会で仕舞を披露する名古屋大観世会の学生たち＝名古屋・三の丸の名古屋能楽堂で

東海地方の大学が加盟している「名古屋学生能楽連盟」（名能連）。八月に名古屋能楽堂で開かれた発表会には、名古屋大の観世会と宝生会、愛知県立大、愛知教育大、椙山女学園大、名東高校の六団体が出演した。ただ番組に並ぶのは、能の一場面だけを面や装束を着けないはかま姿で一人で舞う「仕舞」や「舞囃子」ばかり。一曲丸々の上演はない。今回から名古屋市立大と岐阜大の二校が不参加に。名能連の会長で愛知教育大三年の山下咲璃さん(二〇)は「どこも新入生が集まらず、いつ廃部でもおかしくない」と危ぶむ。

能の上演が難しいもう一つの理由が、資金面。装束や面をそろえねばならず、プロの囃子方を呼ぶため謝礼が必要だ。二〇二〇年には、名能連宝生流の学生が能の上演資金三十三万円余りをクラウドファンディングで集めた。練習でもプロの指導は欠かせず、活動資金は卒業生の寄付に支えられているのが現状だ。

半世紀超の歴史がある名大観世会は、部員が四十人いた時期もあり、部員だけでシテ方や囃子方など全てを担う「オール学生能」が上演できたが現在は四人。会長の二年武田和真さん(二〇)は「能の上演こそ活動の根本。一生に一度経験してみたい」と願う。

名能連は一九五六年に五校で発足。その後加盟校も増え、七〇年ごろには百九十人超の学生が参加していた。発足翌年から「学生能・狂言の会」を開催している。観世、宝生、金剛の三流派が一堂に会する学生能は全国的に珍しく、東海地方の能楽に詳しい朝日大（岐阜県瑞穂市）の米田真理教授は「尾張藩がさまざまな流派の能楽を支えてきた歴史があるからこそ」と話す。

業界も継承危惧 「中高生に体験機会を」

部員減の理由について、米田教授は「部活やサークルに入る学生自体減っている。若い世代に能を身近に感じてもらう機会をつくるのも遅れた」と説明する。

大学進学率が上がった七〇年ごろや薪能ブームだったバブル期は人数が増加した一方、就職氷河期は減少した。近年は就職活動の時期が早まり、サークル活動に打ち込む学生自体が減っている。二〇二〇年はコロナ禍で勧誘活動ができず、新入部員が大幅に減った。

若い世代の取り込みは多くの伝統芸能の課題だが、NHKの教育番組「にほんごであそぼ」で狂言師の野村萬斎が、「からだであそぼ」で歌舞伎俳優の松本幸四郎（当時、市川染五郎）がそれぞれ出演し、親子が狂言や歌舞伎に親しむきっかけになった。

「国語の授業で能を取り上げる機会は増えたが、身近に感じる機会になっていない」

プロには、能楽師の家を継いだ人、学生能出身者、未経験で直接弟子入りした人がいる。学生能が衰退すれば人材不足につながる恐れもあり、観世流シテ方の久田勘鷗は「能の継承には、若い人がいなくてはどうしようもない」と話す。

学生能の意義について、和泉流狂言方の野村又三郎は「外からの視点」の重要性を挙げる。実際、学生能出身の能楽師の意見を取り入れ、公演の改善につながった経験もあるという。「学生能は能楽師の門をたたくきっかけになる。能楽を支え、修繕してもらう存在」と強調した。

米田教授は、学生を増やすため「学生能の良さをアピールしつつ、中高生のうちから能楽を体験する機会を増やせれば」と、業界全体での取り組みを訴えた。

部員減少で廃部の恐れ

こども能楽教室で指導する伊藤裕貴さん＝名古屋市中村区で

米田教授は「東京や関西に比べて、名古屋は学生能出身でプロになった人が多い」と話す。どんな人たちが活躍しているのか。

その一人が狂言共同社の中堅の鹿島俊裕。二〇二一年に名古屋市文化振興事業団の芸術創造賞を受賞し、愛知県東海市の市民大学で狂言教室を開いている。

愛知で活躍する 学生能出身プロ

一九九四年に名古屋大農学部に進学し、名大観世会に入部。「新入生の説明会後のサークル勧誘で、笛と鼓の音が聞こえてきて。それが観世会だった」と振り返る。謡や舞のほか、狂言も学ぶことに。一年生の初舞台で、観客を笑わせる面白さに目覚めた。

在学中から共同社の公演を手伝ううち、自然にプロの道へ。とはいえ、卒業後すぐ専業になったわけではない。飼料会社で働きながら稽古に舞台にと多忙な生活を送った。専業になったのは二〇一四年からだ。

「名古屋の能楽師は半分弱が兼業なのでは」と話す。

専業への道 険しい／こども教室で指導

「人に教える仕事がしたい」と能楽の道に進んだ人もいる。三十六歳で若手の観世流シテ方伊藤裕貴は、同じく名大観世会出身。高校教諭と迷ったが、「教え手が少ない能の方が多くの人の手助けになれる」と考えた。大学で教わった能楽師の師匠である上田貴弘に師事し、五年間神戸の自宅に住み込んで芸を磨いた。

現在は名古屋市中村区の「こども能楽教室」で指導している。十日には、出身の同県春日井市で、初の自主公演「サボテン能」を開く。舞台には春日井特産のサボテンを置いて地元らしさを演出。伊藤は「地元の人に能楽の良さを伝え、他の地域の人が春日井を訪れるきっかけになれたら」。ゆくゆくは、自分の能楽教室を開くのを夢見ている。

（c）.中日新聞社　無断転載、複製、頒布は著作権法により禁止されています